

父と亡き母に

目次

はじめに 3

第一章 辛苦―処女作「花ざかりの森」 5

第二章 相克―「眠れる美女」の迷宮界 53

第三章 瞋恚^{しんに}―市ヶ谷に果てたもの 141

第四章 脱自―セバスチアンの裸体像 239

おわりに 298

*文中、対話の箇所をのぞき敬称は略した。語句に適宜ふり仮名を付し、旧仮名遣いの引用文は詩句などをのぞき現代仮名遣いに改めた。

*年号については、基本的に和暦と西暦を併記するようにしたが、大正一四（一九二五）年一月一四日生れの三島由紀夫の年齢が昭和の年号と一致することから、和暦を主とした。

はじめに

作家が最期を遂げたのは私が中学生のときだった。友人が下校の道すがら肩掛けカバンからそつとグラフィ誌を取り出し押し開いた。そこには床に置かれた作家の頭部が写っていた。

作家の四部作を手にしたのは高校生のときだった。

奥付にはそれぞれ、「昭和四十九（一九七四）年九月二十日 四十四刷」、「昭和四十九年六月二十日 三十刷」、「昭和四十九年七月三十日 二十三刷」、「昭和四十九年十月三十日 十一刷」とあった。

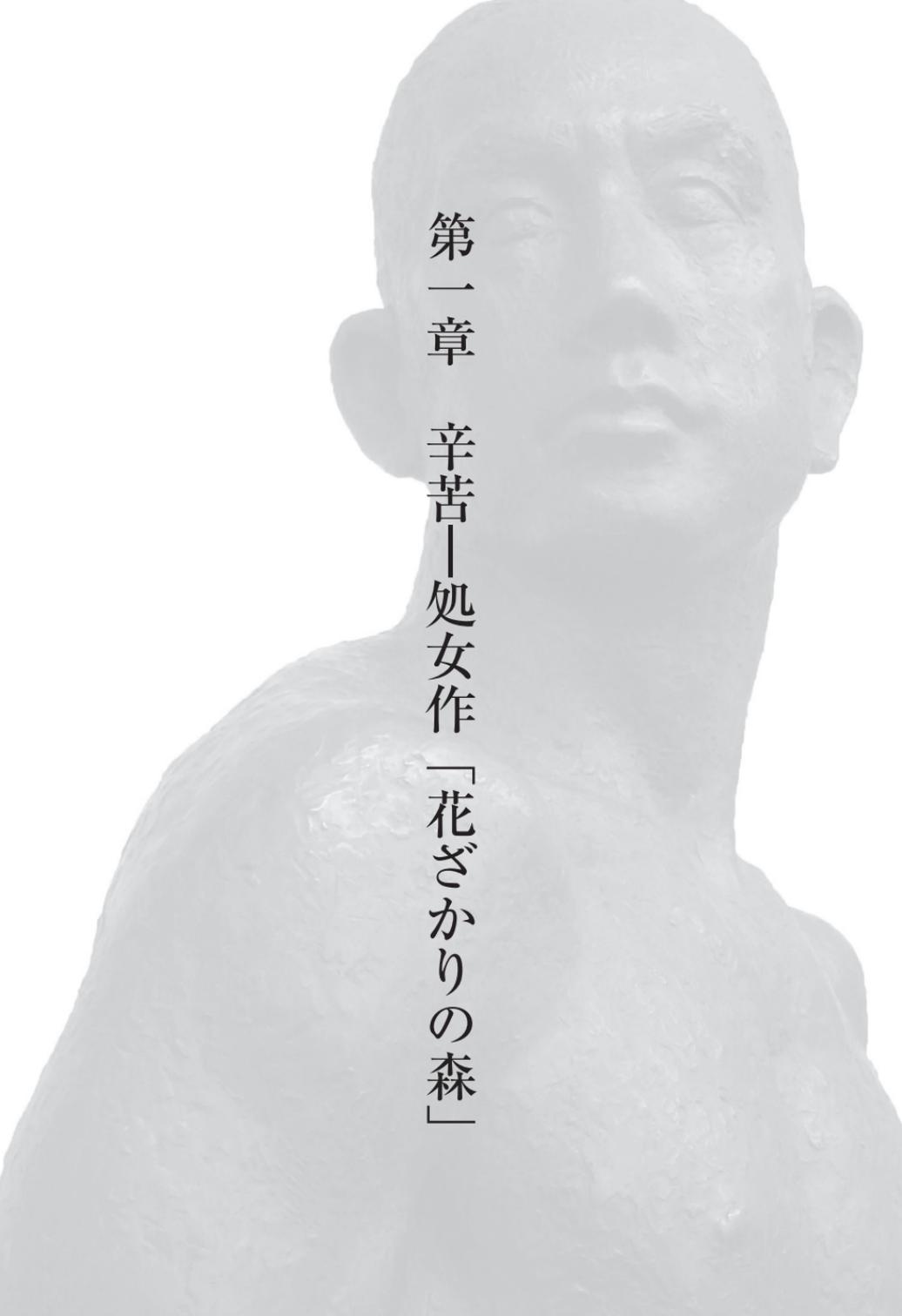
読めない字や難解な用語を辞書で引き読みおえた。作家の自死の衝撃が消えずぎやくにその波紋がひたひたひろがっていた。

地方の少年もそれに嚙まれた。

作家の全集が月命日に一卷また一卷と出だした。高校生には高価で市の図書館で借り出すしかなかった。新しい巻が出る日になると自転車飛ばし背表紙が金でかざられた赤革装のサラを抱えて持ち帰った。

作家の写真入りチラシが祥月の街中にあふれる東京に出て来たのは大学生のときだった。しかしそれはいつしか見られなくなった。古書店の全集の値つけに作家への関心の遷ろいようがあらわれていた。

作家の作品を読み返しはじめたのはその享年にいたったころだった。それから熊本^{おびとけ}の神風連の地をおとすれ奈良^{おびとけ}の帯解三輪桜井などをめぐった。さまざまな資料にあたり事件の裁判記録を閲覧した。作家と生前交流のあった人々や関係者をおとない研究者に意見をもとめた。そうやって作家の死の貌^{かたち}を求めるようになった。



第一章 辛苦—処女作「花ざかりの森」

世に出たいきさつ

「花ざかりの森」の作者はまったくの年少者である。どういふ人であるかということとはしばらく秘しておきたい。それが最もいいと信ずるからである。

もし強いて知りたい人があつたら、われわれ自身の年少者というようなものであるとだけ答えておく。日本にもこんな年少者が生れて来つつあることは何とも言葉に言いようのないよろこびであるし、日本の文学に自信のない人たちには、この事実は信じられないくらいの驚きともなるであろう。

この年少の作者は、しかし悠久な日本の歴史の請し子である。我々より歳は遥に少ないがすでに成熟したものの誕生である。

この作者を知つてこの一篇を載せることになつたのはほんの偶然であつた。しかし全く我々の中から生れたものであることをすぐ覺つた。そういう縁はあつたのである。

これは国文学研究の同人誌『文藝文化』昭和一六（一九四二）年九月号の編集後記である。一六歳の少年がはじめて『三島由紀夫』のペンネームで作品を発表したときのものだ。この後記を書いたのは、成城高校教師で同人誌の発行兼編集人蓮田善明だつた。この言葉とともに『三島由紀夫』という不世出の作家が生れた。いや蓮田の言葉が『三島由紀夫』を生み出したと言つてもいい。そしてその自決という最期も決したと言つていいかもしれない。それほど三島由紀夫、本名・平岡公威きみたけにとつてインパクトのある『激賞』の辞だつた。

このとき平岡少年は学習院中等科の五年生だった。その国文科の教師清水文雄は、蓮田とともに日本浪漫派の流れを汲む『文藝文化』の同人で鋭意の国文学者だった。その清水に「花ざかりの森」の原稿が持ち込まれた。

まもなく学校が夏休みになったので、(蓮田善明・池田勉・栗山理一、それに私の四人の)同人相携えて伊豆の修善寺温泉へ出かけた。編集会議を兼ねた一泊旅行であった。

新井旅館に落ちつくと、私は他の三君に、携えていった「花ざかりの森」の原稿を廻し読みしてもらった。三君の読後感も、私の予想通りで、「天才」がわれわれの前に現われるべくして現われたことを祝福しあい、それを『文藝文化』九月号から連載することに一決した。

『決定版三島由紀夫全集』月報、新潮社、昭和五〇年

清水はこれ以前にも、掲載経過について、「ここ(右の蓮田による編集後記)に書かれてあることは、同人全員の思いの適切な代弁である……」(『文学界』二月号、昭和四六年)と述べている。しかし蓮田の次男太二(熊本市の慈恵病院院長で、通称「赤ちゃんポスト」の主宰者。病院は故長兄・晶一との共同経営)は、父善明は母敏子に、『花ざかりの森』の掲載を当初同人全員は賛成しなかった。賛成しない同人を説得して掲載に漕ぎつけた」と話していたと言う。善明は太二の物心がつくまえに逝ったので、母からそう聞いていたのだ。そして清水は和を尊ぶ性格で、ほんとうの成りゆきを伏せた、と言うのだ。

ここで清水の性格をうかがわせるエピソードを紹介しよう。彼が後に奉職した広島大学の教え子で国文

学者堀江マサ子によると、清水はある時期、教室関係の学生に自殺者が相ついでことに心を痛めたという。そこで彼らが孤立しないようOBも加えた光葉会という交流サークルを立ち上げ主宰した。清水が、得意なフォークダンスやハイキング、小旅行をする活動的な愉しい集まりだったと回想している。もしそうなら、蓮田はこの後記を読者だけでなく、掲載に難色をしめした同人仲間にもむけていたことになる。おそらくこのことは三島の知れるところとなり、蓮田に謝するおもいはよけい高まったことだろう。

「三島由紀夫」誕生の瞬間

さて「三島由紀夫」というペンネームが生れた行く立てを、清水は先に引いた月報でつぎのように記している。

掲載するにしても、彼がまだ中学生の身であること、それに御両親の思わくなども考慮して、今しばらく平岡公威の実名を伏せて、その成長を静かに見守っていた——というのが、期せずして一致した同人の意向であった。(中略)旅館の一室で、だれからともなく言い出したヒントは、「三島」であり「ゆき」であった。東海道線から修善寺へ通ずる電車に乗り換える駅が「三島」であり、そこから仰ぎ見たのが富士の秀峰であったことが、ごく自然にこの二語を選ばせたのであろう。それがその席で「三島ゆきお」までは固まったと思うが、「三島由紀夫」まではゆかなかったと記憶する。(中略)(平岡君は『文藝文化』に掲載することは喜んで承知したが、筆名の一件を切り出すと、はたして「平岡公威ではいけませんか」と反問してきた。しかし、同人の一致した意向を伝えると、案外素直に、それではどう

いう名前がよいかと意見を求めてきた。どういふ名前をと聞かれて、さきの試案の経緯を一通り説明したうえで、「三島ゆきお」はどうかと、おそるおそる言ってみた。しばらく考えていたが、やがて持ち合わせの紙片に〈三島由紀雄〉と書いて、「これはどうでしょう」と言った。私は字面から見て、「雄」は重すぎると思ったので、それを消して「夫」と改めて彼の手許に返した。「それでは、これに決めます」といふ彼の一言で、「三島由紀夫」の筆名がうまれたのであった。

(同)

同人の一人、池田勉も、「三島」といふ姓が誰の口からともなく、自然にすらりと生れ出た。仰ぎ見た富士の白雪のさわやかなイメージも残っていて、三島の姓につづいて「ユキオ」といふ名も、風の流れるように、そして雲のおりてくるように、姓と名とは自然に結びついた。「花ざかりの森」の原稿は、こうして三島由紀夫の筆名を得て、清水から作者の手もとに帰った(『ポリタイア』昭和四八年)と恩寵のように筆名がうまれたと述べている。

さて、平岡少年は、「清水から作者の手もとに帰った」原稿用紙の一枚目にペンで書いた本名を鉛筆で二本線で消し、その右に、終生使うことになる筆名をやはり鉛筆で記していた。おそらく清水に呼び出されて筆名を決めたときに、その場で手持ちの鉛筆で書き入れたのだろう。これが自作の原稿に「三島由紀夫」と付す嚙矢くはしとなった。そして三島由紀夫の処女作となった。作家・三島由紀夫が誕生した瞬間である。この「瞬間」は昭和一六年八月はじめごろだったようだ。三島は学習院の先輩の東文彦に出した八月五日付けの手紙で、『花ざかりの森』は清水文雄先生だの、松尾先生だのがやっている雑誌にのせていた。

くことになった」と伝えてゐる。書きあげた原稿同様、即座にしらせたと思われる。ということはこの日付の直前ということになるのだ。三島自身は筆名の由来についていささか異なることを述べている。

目白の教員宿舍の（清水）氏の書斎で、一日、中学生の私は自分の筆名を練った。伊藤左千夫という歌人の万葉風の名が、どういうわけか、私を魅していた。好い試案がうかばなかつたので、はじめ由紀雄という名を考えて、坐りのいい姓を、と思つて、そこらにあつた名簿を繰り、三島という姓を案じた。先生は、別に干渉もしないで、黙つて私の永い思案を眺めておられた。私は「三島由紀雄」と書いて渡した。清水先生は膝に赤ん坊を抱いてゆすりながら、その紙をしばらくじつと見ておられた。若白髪が目立つ鬢が庭の若葉の反映に光つてゐる。それから先生独特の不器用な手つきで、つと手をのばして、紙片を私に返して、こう言われた。

「雄は、夫のほうがよくはないかな」

二三月月して「花ざかりの森」が「文藝文化」に連載されでしたが、それが私の筆名を使ったはじめてである。

『三島由紀夫作品集 4・あとがき』新潮社、昭和二八年

同じ年の『東京新聞』に「私のペンネーム」と題して「あとがき」とほぼ同じことを簡略に書いている。そこでは「抒情詩風のペン・ネームではずかしい。取柄といえば、文壇に他に同姓の人のいないこと、姓にも名にも濁音がないので音の比較的耳に快いことぐらいであろう」と述べてもいる。三島の父親はさら



「花ざかりの森」原稿、筆者撮影

に異なることを言っている。

俣が電話帳を持ってきて、これを盲滅法ひらいてちょうど開かれたページの左上の最初のものをペン・ネームにしようということで、その通りやってみましたら、三島何某とあったので、それが警視庁刑事部勤務の鬼警部の名前であったか、小料理屋の名前であったか、果物屋のものであったか、高利貸のものであったか全く不明ですが、これを採ってしまったわけです。

由紀夫という名前の方は誰か古い作家、二、三名の名前をミックスして感じが御意に召したのをとつたもので、恩師とか愛好作家のものをとつたのではありません。要するにこのペン・ネームは全部出鱈目のものなのです。

僕は、「お前がこんなペン・ネームをとるのもすべては運命なので、その誕生のいきさつを理詰めに考える必要は何にもない、運命の命ずる名前なら何でもいいのだ」と申しました。

「俣・三島由紀夫」『諸君!』昭和四七年一月号

『諸君!』の当時の編集長・田中健五は梓が風呂敷をひろげる性癖のあったことを認めている。

『花ざかりの森』を書いていたころ一〇代の三島由紀夫はけっしてめぐまれた家庭環境で日々原稿用紙にむかっていたのではなかった。母は親身に応援してくれていたが、つとに知られているように父親は三島の文学への熱中ぶりを目の敵にした。その父が昭和一二年からの四年間ほどは大阪に単身赴任していて自由に創作できたようだが、一六年に入ると早々東京にもどってきた。その父に小説を書かないことを誓わされるのだ。

妹美津子は親友の佐々悌子に「でもね、かわいそうなのうちのお兄ちゃま、お父さまとお兄ちゃまの意見が合わないんですもの、お父さまは、小説家なんかにならず役人になれっていうし、お兄ちゃまが小説を書いていると、いい顔をしないの。見つけると片っぱしから破って捨てちゃうの。ほんとうにかわいそう。いいお母さまがスゴクお兄ちゃまを理解してるの。破りすてられてもまたすぐ、こっそり原稿用紙を補充しているらしいのよ。だから、お兄ちゃまが小説を書けるのはお母さまのおかげよ。お兄ちゃまがお父さまに反抗すると、想像もつかないほど怒り狂うのよ、お父さまは

安藤武 『三島由紀夫の生涯』夏目書房、平成一〇年

こういう状況は三島が大蔵省に入るころまでつづいたという。右文中の佐々悌子については第四章でふれる。

おわりに

私が熊本の地を訪れ、三島由紀夫氏が昭和四一年に『奔馬』の取材で来熊したときの行跡をたどったのは、もう一〇年以上前になる。神風連資料館の方から氏が立ち寄ったという市街の喫茶店を教えて頂いた。メニユーは不思議な味の水出しコーヒー一品だけという狭い独特な趣きの店だった。まえの東京オリンピックの年に開店して以来、一人ですつとやっているという店主も不思議な雰囲気（きまぐれ）を醸し、氏が何度も忍んで来ていたと話していた。「三島神話」はそこかしこで独自に成長しているようだ。

そのとき以来、小著を上梓しようと思ひ立った。徳岡孝夫氏が、『三島事件』に立ち会った私』で述べられたことを巔として、それを支えるすそ野を広げていったら、かようなひと山となった。

昨年は「花ざかりの森」の原稿のために熊本を再訪した。所蔵されている蓮田太二御夫妻と「おく村」で会食した。そこは五〇年前に三島氏が太二氏の母堂と会食した老舗の料亭だった。

いつだったか、山中湖畔での集まりで三島文学館の関係者と雑談をした。そのとき、戦前の学習院という特異な環境が氏に及ぼした影響について、まだ十分に説明されていないことが話にのぼった。たしかに氏はその一〇代に学習院の他では得られなかっただろう師や先輩との清冽な文学的交流を得た。そのなかで、内外の古典文学、近代小説、詩、浄瑠璃・謡曲などを耽読濫読し、鏡花、馬琴、近松、ラディゲ、リルケ、リラダン、ワイルド、ヘルダーリン、ニーチェ、サド、セバスタアン、それらをとおして、美、エロス、そしてタナトスに親しんだ。実生活を通じて、二・二六事件、特攻隊、神風連、天皇、恋、さまざままな死とも出会っていた。氏にあの結末をもたらした、人生の軌跡の秘鑰はその一〇代の学習院時代にあ

る。

第一章では、その一端の解明につとめた。

第二章では、氏が二〇代以降交わった川端康成氏との関係性を論じた。これについて、川端家からのコメントを期待したい。

第三章には、事件で死した楯の会隊員の一人と生き残った三人のおもいを置いた。そして、「三島事件」のいくつかのミステリー、謎を取りあげ論じた。そこには事件の相貌を一変する佐々淳行氏の証言も置いた。同氏は日々の行動と時々の見聞を詳細に手帳に記していた。幾冊もの手帳は、他の資料とともに国会図書館に寄贈された。これが調査研究されれば六〇年、七〇年安保騒乱、数々の過激派テロのあった昭和という時代の治安、安全保障面からの姿がより明瞭になることだろう。中曾根康弘氏についても書いたが、ご本人からのコメントを期待したい。

「影の楯の会隊員」だったNHK記者伊達宗克氏にフォーカスする紙幅はなかったが、伊達氏は事前に氏の決起を知っていたようだ。

第四章では、氏が死に向かった心中の解明を試みた。これまで制作意図やその経緯が不明だったため等閑視されていた氏の等身大像を論じた。氏はそこに^{ゆるが}忽せに出来ないものを秘かに籠めていた。分部順治氏作とされていたが、吉野毅氏も制作にかかわっていた。氏が決起の直前、足繁く通ったアトリエの当時のままの大鏡は、自死に向かう氏の聖セバスチアンになりきった表情と姿を映していたのだ。

井上隆史氏には大学の研究室で、あるいはメールで、電話でもさまざまな質問に応じて頂き、貴重なア

ドバイスを頂いた。富岡幸一郎氏には小著のエッセンスの一部の『表現者』への掲載をご快諾いただいた。田中美代子氏には数々の御教示をいただいた。死の直前の氏が語りおろした「革命哲学としての陽明学」を『諸君!』に掲載した田中健五氏（最初の出会いは「橋づくし」の原稿取りだったという）、まったくマスキミに出ない瑤子夫人からインタビュー記事を取りつけた立林昭彦氏、平岡梓氏の『倅・三島由紀夫』の『諸君!』連載時の担当者東真史氏からも貴重な話をうかがった。小著には盛り込めなかったが、寺田英視氏には保田與重郎について草した小文に御指摘を頂いた。朝日新聞記者岩崎生之助氏、葛飾区議平田みつよし氏には取材の御支援を頂いた。以上各氏と小著刊行に御協力と御尽力を頂いたすべての関係者並びに版元に、心からの感謝を申し上げます。

旧帝国陸軍軍人で元自衛官平城弘通氏ひろしやうには、もう五年前の厳冬の中、体調不良にもかかわらず、長時間の取材に複数回応じて頂き、又幾通もの篤実な信書を戴いた。しかしその後まもなく亡くなられた。心より哀悼の意を表する。平城氏からうけたまわったことは今回ほとんど盛り込めなかったが、別著に生かす所存である。

平成二九年九月一日

不一 筆者識

西法太郎（にし・ほうたろう）

1956（昭和31）年長野県生まれ。東大法学部卒。総合商社勤務を経て文筆業に入る。「21世紀の日本を考える竹林会」主宰

【執筆】

「三島由紀夫わが姉の純愛と壮絶自決現場」『文藝春秋』2014年1月号

「潮っ気にあふれた若者たちの魂よ」『文藝春秋』2013年10月号

「新資料発掘—歴史に埋もれた『三島由紀夫』裁判記録」『週刊新潮』2012年11月29日号

「『影の軍隊』元機関長が語る『自衛隊』秘史」『週刊新潮』2012年8月30日号

「三島由紀夫—聖セバスチアンのポーズに籠めたもの」『表現者』2017年5月、7月、9月号

「三島由紀夫の処女作『花ざかりの森』肉筆原稿」『表現者』2017年3月号

「歴史発掘スクープ 三島由紀夫「処女作」幻の生原稿独占入手」『週刊ポスト』2014年1月25日

「三島由紀夫44年越しの『全裸像』発見！」『週刊ポスト』2014年1月17日

『産経新聞』『朝日新聞』『毎日新聞』『夕刊フジ』『正論』『WILL』『新潮45』『Voice』『FACTA』『激論ムック』などに執筆多数

死の貌——三島由紀夫の真実

2017年11月30日 初版第1刷印刷

2017年12月8日 初版第1刷発行

著 者 西 法太郎

発行人 森下紀夫

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1669-2 © Hohtaro Nishi, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。